

雑誌コラム紹介

<世界エネルギーマップ>

カスピ海と欧米を繋ぐ「BTCルート」の地政学*

常務理事・首席研究員 十市 勉

カスピ海周辺は「第2の北海」と称される。ピークを過ぎた北海油田に代わるものとして大きな期待を集めたこの地域に、欧州・アメリカの命綱ともいえるパイプラインが来年初めにも完成する。

バクー、トビリシ、セイハンを結ぶ全長1,765kmのパイプライン、BTCルート。各国がエネルギー戦略でしのぎを削る「グレート・ゲーム」の舞台に、欧米が作ったエネルギー回廊だ。バクー沖に位置するACG（アゼリ・チラグ・グナシリ）油田はBTCルートの完成に合わせて本格操業を開始し、2008年までに120万バレル/日の生産を目指す。

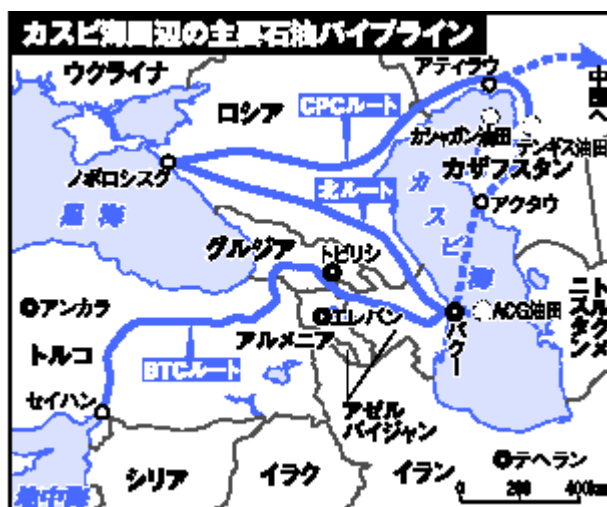
アゼルバイジャンのエネルギー開発に外資が導入されたのは1994年。9月に開かれたその10周年記念式典には、グルジア、カザフスタン、ロシアなどから政府高官たちも出席した。ACG油田とBTCルートのオペレーター（操業主体者）である英BPのジョン・ブラウン社長は、アゼルバイジャンの新たな指導者となったイルハム・アリエフ大統領に対し、「閣下とアゼルバイジャン国民のために、この素晴らしい10年を祝いたい」と最大限の敬意を表して見せた。

イラク戦争以後、不安定さを一層増している中東へのエネルギー依存度を下げることが、欧米にとって至上命題であることは言うまでもない。だが、その最有力候補であるカスピ海周辺のエネルギー情勢は、ロシア、イランという二大プレーヤーの影響下にある。単純に経済性だけ見れば、BTCルートよりもロシアのノボロシスクに延びるパイプライン経由で黒海に積み出すルート（北ルート）あるいはイラン北部まで運んだ後にスワップ取引を利用してペルシャ湾から再輸出する方法に分があるはず。しかし、この2国は欧米にとって、完全に信頼できるパートナーとはなり得ない。

さらにアゼルバイジャンの対岸には、将来的にロシアに続く産油国になる可能性が高いカザフスタンが控えている。現在、カザフの産油量は110万バレル/日。その中心となるテンギス油田からの原油は、主にCPC（カスピ海パイプライン・コンソーシアム）ルートでノボロシスクに運ばれている。つまり、これも「ロシアに押さえられた原油」なのである。2008年には新たにカシャガン油田の生産開始も控えており、欧米はこれらの油田もBTCルートとパイプラインで結ぶことで、ロシアの影響力を排した輸出ルート作りを狙っ

* 本文は新潮社発行「フォーサイト」2004年11月号に掲載されたものを転載許可を得て掲載いたしました。

ている。



一方で、カスピ海周辺諸国のエネルギー外交も活発だ。BTCルートによってパイプラインの通過・運営収入が見込めるグルジアとトルコだけではない。今年3月にアゼルバイジャンを訪れたカザフスタンのナザルバエフ大統領は「私はこのパイプライン（BTCルート）を通してカザフスタン産原油が輸出されることを確信している」と述べ、ロシアを迂回した石油輸出に強い意欲を示した。近年、アメリカがカザフスタンへの経済・軍事援助を活発化させてきた背景には、こうした流れを後押しする意図があることは明らかだろう。

欧米にとって悩ましいことに、「グレート・ゲーム」の新たなプレーヤーには中国も名乗りを上げた。最近になって中国とカザフスタンは、新疆ウイグル自治区トウジャンズ独山子とアティラウを結ぶ全長3,000Kmに及ぶパイプラインの建設で合意、この9月に着工した。アメリカはこれを嫌って、国際金融機関に融資中止を求めるなどの圧力をかけてきたとも囁かれる。

中国は新疆ウイグル自治区を国家の石油基地にする「西油東進」構想を掲げている。その版図は国内に止まらず、カスピ海にまで拡大されようとしている。中国とカスピ海が繋がれば、次はパイプライン網が中東まで延びていくであろう点も見逃せない。従来のシーレーンに加えて中東と東アジアを結ぶもう一本の「エネルギーの道」ができる意味合いに、改めて目を凝らす必要も出てくるはずだ。

もちろんロシアがカスピ海沿岸諸国の離反を座視し続けるとは思えない。同時にカスピ海沿岸諸国がロシアの影響力を無視することも不可能だ。今年2月にロシアのプーチン大統領と会談したサーカシビリ・グルジア大統領がBTCルートをロシアに繋ぐ提案をしていることに、この地政学の複雑さが見て取れよう。投機マネーも参加する市場を舞台に原油価格が高騰する中、エネルギー確保をめぐる国家同士が角突き合わせる現実のフロント（前線）がここにある。（この連載は隔月掲載です）

お問い合わせ

report@tky.ieej.or.jp